

更新日: 2023/3

◆カンキツかいよう病越冬病斑量調査

●発生と生態

- ◎病原菌は、主に病斑中で越冬し、春先気温が高くなるとともに伝染を開始する。
- ◎かいよう病は細菌性病害であり、強力な伝染性を持っているため、防除の不徹底や好適な気象条件が揃えば、大被害に結びつく。
- ◎病組織に雨滴が当たると、そこから多量の細菌が飛散し、次々と伝染する。
- ◎伝染は、生育旺盛な新葉、幼果、夏秋梢葉の若い組織で起こりやすく、樹齢の若い樹や軟弱徒長の樹で多くなる(特に発病した夏秋梢葉は、本病の越冬伝染源となる)。
- ◎風速が6~8mを超えるような強風があった場合、樹体に傷ができやすくなり、病原菌の侵入が容易になる
- ◎また、ミカンハモグリガ幼虫の食害痕は、重要な侵入口となる。
- ◎温州みかん・ポンカン・ハ朔などは発病は少ないが、新品種(‘甘平’‘はれひめ’等)は感受性が高いので注意を必要とする。

●病徴と診断

- ◎本病は、葉、枝、果実に発生する。
- ◎はじめ水浸状の斑点を作り、やがてその部分が盛り上がり、コルク化して病斑中心は破れ、周囲には水浸状、後に黄色の縁取りがある丸い斑点ができる。
- ◎葉に激しく発病すると、早期の落葉をとめない、緑枝に発病すると枯れ込む場合もしばしば見られる。
- ◎果実に発生すると外観を著しく損ない商品性を低下させる。



葉での発病



果実での発病

●調査結果

表1 伊予柑におけるかいよう病の越冬病斑調査(1~2月調査)

| | R5 | 平年値 | R4 | R3 | R2 | H31 | H30 | H29 | H28 | H27 | H26 | H25 |
|--------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 調査圃場数 | 154 | - | 178 | 180 | 190 | 192 | 183 | 183 | 166 | 157 | 155 | 136 |
| 県全体 発生圃場率(%) | 61.7 | 52.6 | 77.0 | 49.4 | 55.3 | 56.8 | 59.6 | 49.7 | 39.2 | 46.5 | 41.3 | 51.5 |
| 発病度 | 4.6 | 5.5 | 11.6 | 4.7 | 4.4 | 5.4 | 4.0 | 5.9 | 4.0 | 6.2 | 3.7 | 5.1 |

注: 発病度 = (甚 × 7 + 多 × 5 + 中 × 3 + 少 × 1) / (調査樹数 × 7) × 100

◎本年度は、発生圃場率、発病度ともに多であった。

●防除方法

- ◎防除は、3月中旬~3月下旬の発芽前防除、4月下旬~5月上旬の開花前、5月下旬~6月上旬の落弁直後、6月中旬~9月に実施する。
- ◎この間、強風を伴う前線や台風の襲来が予想される場合は、その前に迅速に防除を行う。
- ◎夏季にミカンハモグリガの防除を徹底する。
- ◎薬剤防除と同様に以下の耕種的防除を行うことも重要である。
 - ・風当たりの強い園地では、防風対策を強化する。
 - ・被害枝葉を取り除く。特に、夏秋梢は主要なかいよう病の伝染源となるため、発病した夏秋梢の処分を徹底する。